

余瀟全日記

大菩薩峠と富士

美和勇夫

大菩薩峠(二〇五七M)は甲斐と武蔵の国境にある。峠は視界三六〇度の展望をほこり、ここに至る山路からの「裏富士」の景色は特に名高く、五〇〇円札の裏面の写真ともなっている。よく晴れた日の夜には、遠く東京のネオンの点滅が見えるともいわれている。

★ ★ ★ ★ ★

中里介山のえがく「大菩薩峠」の主人公、ござんじ、机竜之助は、

黒の着流しで、えびざやの脇差をさし、この険しい山道を下駄ばきのまま武蔵の側から、さっそうと登ってきて、甲州路を見廻し自刃をふりかざして巡礼を斬る。小説、「大菩薩峠」は中里介山が三〇年近くにわたって、かきつづけた四十数巻の大長編である。しかるに不思議なことに、介山は大菩薩峠において、全くこの「富士山」を画いていない。井出孫六氏はそ

の紀行文の中で、介山が富士を描写しなかったのは、介山が大菩薩峠に登っていないかったという単純な理由によるのではないかと疑問を呈している。その理由として、氏が自分でこの峠に登ってみて、机竜之助が、すあしにゲタばきのいでたちで大菩薩嶺をきわめたことが著しくリアルティ(現実性)に欠けるからと指摘されている。

★ ★ ★ ★ ★

あれは昭和四〇年のまだ、はだ寒い季節の頃であつたろうか。夜の新宿駅へ、夜行で登山に行く連中を見送りに出かけ、列車に乗りこんだものの帰るのがめんどうになつて、そのまま、私は行く

で、そのまま、私は行く割れた。そのあとは素足である。後悔先に立たずとはこのことであつたがまさに記念すべき登山ではあつた。

★ ★ ★ ★ ★

富士の山がどのていどに美しかったのかとて今、記憶には残っていない。貧困であつたが故に、当時の社会主義にひかれざるを得なかった介山は、絶景であるが故に富士を無視し去つたのか。人間のもつ業(ごう)を流転輪廻のなかに描き出すのに富士など必要でなかったのか。それとも、知らなかったことなのか? (筆者は多治見市上野町在住)